

東京都の調査報告より

若者に社会不適応をもたらさないために

<「ひきこもり等に関する年齢層別未然防止対策調査検討報告書」の概要>

東京都は、平成19年度から2か年にわたり、東京都におけるひきこもりの実態調査を行いました。ひきこもるきっかけとしては、就労に関するつまずきの経験によるものが多いこと、「ひきこもりに親和的な若者（ひきこもり親和群）」が存在すること、ひきこもり群とひきこもり親和群はどちらも人間関係に苦手意識をもつこと等が明らかになりました。

平成21年度は、これまでの都の実態調査や公表されている類似調査の結果、さらに今回新たに実施した調査の結果等に基づき、学校段階から就労段階の若者に対する、学校その他の関係機関における対策や配慮事項を検討しました。

I 成長・発達の見点からのアプローチ

1 中学生・高校生・大学生に見るひきこもり親和性 (p.9~p.29)

ひきこもり親和群の、ひきこもりに親和的な傾向は、突然出現したわけではなく、その生育史の中から次第に形成されてきたものと推測される。そこで、中学校、高校、大学に所属する生徒・学生を対象としてサンプルリング調査を実施した。

→親和群については、一般の若者を対象とする調査から抽出された親和群とほぼ同じ傾向が示された。

→中学生から大学生のどの年代層にも、ひきこもり親和心性をもつ若者が20人に1人存在。

◎ひきこもり親和心性は、病理とは一線を画す性質であり、基底にある気質に心理的・社会的要因が絡んで形成されるパーソナリティにおける特徴としての側面が推定される。

2 幼児期における自我形成の課題からひきこもりを考える (p.30~p.36)

ひきこもりの状態にある若者の、現在の自我機能や幼少期から小学生までの親子関係についての調査を実施。

→ひきこもる若者は幼少時、やさしくおとなしい、短気で周囲を困らせるということもない子であったという傾向が見られた。また、愛情剥奪*状態の子どもに少なくないとされる、チック、指しゃぶりなどの症状を見せていた者もいた。

*愛情剥奪：幼児が親（または主たる養育者）から「当然受けるべき適切な世話を受けられなかった」ということを意味する。

→ひきこもる若者の自我機能（人間の持つ知覚・感情・思考・行為などの心の働き）は、健常群（精神面に病理性を有しているとは認められない群）に近い。

◎親の情緒的・身体的関心や世話が十分に与えられなかった者は、基本的な自他への信頼感を獲得することが難しくなるとされている。

◎それでも、幼児期から、不満や不適應感をもったとしてもそれを表現しない、おとなしくてわがままを言わない子どもとして、親もそれほど手をかけることなく成長していったプロセスが、そのまま子ども時代にも継続していき、そしてそのことによって何とか青年期までは集団生活を継続することが可能になっていたのだと思われる。

3 不登校とひきこもりの関連性について (p.37~p.45)

不登校がそのままひきこもりに移行するというケースは決して多数派ではないが、学校時代の不登校に対し適切な対応や治療がなされず長期化した結果、ひきこもりに移行するケースがあることも事実である。

高校・大学では、休んだり遅れたりしながらでも、「だましまし」所属できる場所がある。しかし、いったん「社会人」となると居場所を提供したり、適応支援をしてくれる場所は（公的・民間も含め）一気に少なくなる。

◎自他への信頼感を回復させることが大切。

→支援のベースとして、「居場所（相談できる場所、自分が自分でいられる場所）」や、「自分のことを理解してくれる人（支援者やカウンセラー、友だち、保護者など）」の存在が不可欠であると言える。

1 ひきこもり化させないための学校環境づくり

ひきこもり親和の生徒は、一般的な生徒とのプライベートな接触時に彼らの行動規範が否定されることで傷つくことが多い。昼休みと休み時間に、ひきこもり親和の生徒が彼らの①プライバシーを維持し、②プライドを損なわずに、③平安を確保できる場面を創出することが課題となる。具体的な施設のイメージは学校内の生徒用のサロンというべきものである。

従来のカウンセリングルームとの違いは、専門家の管理のもと、カウンセリングルームとしての側面をもちつつ、一般的な生徒も含め、多様な生徒が集えるサロンとして維持される点にある。

2 家族療法による家族支援

家族療法の方法（家族と本人の関係改善を図る）

- (1) 本人の行動を①好ましい行動、②好ましくない行動、③危険で許し難い行動に分け、好ましい行動をほめる。
- (2) ほめることを通して家族関係が良好になり、そのことによって会話が増え、多くのケースに「家庭内の手伝い」が出現。
- (3) この「家庭内の手伝い」がほめられると、自己効力感が高まり、それが家族内の好循環を生み出す。

ひきこもりは性格・行動傾向といった個人の属性の問題だけではなく、家族関係や友人関係、地域との関係などの関係性の問題が必ず存在している。親子関係、家族関係の改善により、家庭内での「居心地のよさ」が促進され、家庭内での「手伝い」につながり、さらにそれがほめられることで、家庭内に好循環を生み出していく。ひきこもっている本人の自己効力感の高まりが、実際の家族療法の現場において認められている。

3 言葉だけを重視するのではないコミュニケーション能力を開発する教育

自分の思いを相手にわからせるために必要最小限の言語化能力を身につけさせることも大切であるが、同時に言葉にならない（出来ない）相手の思いを受け止める（察する）力を、すべての子どもたちに（大人たちにも）育む教育を工夫すべきである。

II キャリア教育の視点からのアプローチ

1 キャリア教育とひきこもりの認識 (p.46~p.49)

平成11年12月、中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」における、「学校と社会及び学校間の円滑な接続を図るためのキャリア教育（望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識を身につけさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育）を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある。」との記述をもって、キャリア教育が定義された。

◎ ひきこもる若者たちの社会的自立が不十分であるとみなされていることと、ニートといわれる若者たちの職業的自立が不十分であることを重ねてみると、社会的自立、職業的自立を促進するキャリア形成の必要性が浮かんでくる。

学校段階でイメージされているキャリア教育は、職業体験・インターンシップである。これらはキャリア教育において重要な位置づけをもつが、現在学校教育で行われているキャリア教育は、職業理解や体験に特化した狭義のキャリア教育ではなく、生き方全体にわたる広義のキャリア教育と解釈されている。

◎ 「小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引」（文部科学省,2006）

「生きること、学ぶこと、働くこと」が、キャリア教育によって展開する対象として位置づけられている。変化の激しい社会に適応するためには、3つの教育内容を、連合させていくことが求められている。

1) 就労前教育の課題

ひきこもりと同様、社会不適応の一形態としてニートがある。ニートとは「非労働力人口のうち、年齢15~34歳、通学も家事もしていない者」の呼称である（「労働経済白書」厚生労働省、2005~）。「ニートの状態にある若年者の実態及び支援策に関する調査研究報告書」（財団法人社会経済生産性本部、2008）によると、ニートも対人関係に苦手意識をもつことから、ニートに関する既存調査の結果から検討を行った。

ア 早い段階での学校不適応の問題

中学校段階での学校不適応が、ニート等の就労後の不適応に結びつくとは言えないものの、その後の人間関係の苦手意識に与える影響は大きく、高校、大学、就職後の不適応へと波及していく可能性は大にある。

イ 異年齢集団との交流不足の問題

異年齢集団との交流を十分に経験していない若者の中には、職場で10歳から20歳以上も年の離れた大人とどのようにコミュニケーションをとって良いのかが分からない者もいると考えられる。

ウ 家庭内・家族間でのコミュニケーションの問題

過去の調査で、ニート層の家庭においては両親の夫婦仲があまり良好でなかったり、家庭の雰囲気が明るくなかったりなど、家庭内のコミュニケーションが良好でなかった可能性をうかがわせる結果が得られている。

2 職場不適応を起こす原因

ひきこもりもニートもともに、学校卒業後に直接無業の状態になるというよりは、むしろ、一定の就労経験を経て無業に至る場合が多い。すなわち、何らかの意味で職場不適応を生じることによって無業に至っている場合が多い。そして、その無業の状態が世間的には「ひきこもり」と見られたり、「ニート」と見られたりするものと考えられる。そこで、これまでさまざまな調査結果で、ニートに関して言われてきた事柄をもとに、ひきこもりのきっかけとして指摘されている、就職した先における職場不適応の原因の検討を行った。

ア 仕事に対する不適合感

仕事内容をよく知らないままに就職してしまったために、その仕事内容に興味や関心がもてずに不適合を感じるという場合がある。他方、仕事内容というより、働き方になじめず、仕事への不適合を感じるという場合もある。

イ 人間関係の不調

少子化の進行に伴って以前に比べて子ども時代に十分な他人との交流をもてこなかった若者が、年齢の離れた先輩しかいないような職場でコミュニケーションをとらなければならないという状況が生じている。

ウ 身体的な職場不適応

本人の身体能力・運動能力・体力と仕事をこなす上で求められる労働負荷が合致しておらず、結果的に体を壊すといった形で職場不適応が表面化する場合がある。

エ 学校卒業時の就職活動に対する不適応

就職前の採用プロセスに適應できない場合、就職活動を行っても内定を取得できない場合には、いわゆる「無業者」として学校を卒業することになる。このことも、その後のひきこもりの遠因になる可能性は考えておきたい。

これら4点の職場不適応は総じて、最終的には、自己評価等の低下に結びつく。ニートおよびひきこもりに共通する最大の課題とは、この自己評価の低下が、職業生活のみならず生活全般に波及し、総体的に生活全体が不活性なものになっていくと考えられることにある。最終的には、自己評価等、心理的な側面に対する適切な介入が、ひきこもり等社会不適応の対策を考える際には極めて重要な要素となってくると推定される。

1 学校段階における対策

(1) 学校段階での対応

ア 在学中の対策

○生徒に、不測の事態に直面しても、自ら積極的に支援を求めていける力を身につけさせる。

イ 保健室登校をしている児童・生徒への対応

○少なくとも保健室に児童・生徒が登校している時間は教員が配置され、適応指導教室のように習熟度に合わせた教材が用意されることが望ましい。

ウ 小学校で不適応が顕在化している児童への対応

○中学入学の前段階で、進学予定の中学校のスクールカウンセラーとかかわりをもてるようにする。

(2) 学校段階における進路指導・キャリア教育のあり方

ア 広く指導ができる態勢

○教師が、生徒が自らの進路（生き方）を主体的に選択する力を育てる指導をするための技量を身につけることで、充実した進路指導・キャリア教育の展開が可能になる。

○教師の進路指導・キャリア教育の研修会への参加や校内での実践の共有化ができるシステムを作る。

イ 保護者を巻き込んだ進路指導

○家庭において子どもと進路について会話をする機会を増大させる。

○PTAに、進路行事を共同で開催するなど学校進路指導が手薄な部分の支援を依頼する。

○進路行事を夕方以降に実施することで、保護者が生徒と同伴で直接進路情報と触れ合う機会を保証する。

○生徒を通した文書配布だけでなく、保護者と時機を得た進路情報をやりとりするため、携帯メールを利用する。

(3) 家庭でできること

○家庭の手伝いや地域のボランティア活動など（ペットの飼育や植物の栽培、掃除、地域での奉仕活動、地域清掃など）を通し、子どもが他者に対し役割を果たす場を積極的に創出し、勤労観や職業観の育成に配慮する。

2 就労前から就労段階における対策

(1) 学校教育から就労への円滑な移行に必要なこと

ア 学校段階の進路指導・就職支援を含むキャリア教育全般の拡充

○人間関係の構築、コミュニケーション、人とのつながりなどをも視野に入れる。

イ 年齢や価値観が異なるなど、「多様で幅広い他者」とのコミュニケーション経験の強化

○職場体験学習およびインターンシップの取組を拡充する。

ウ 就労前段階におけるコミュニケーションの訓練

○職場におけるコミュニケーションでは、職場におけるさまざまな場面で、適切に人と交流できることが求められている。

(2) 就職後の適応性を育むために必要なこと

○就職後の適応性を育むために必要な支援は、本人の自信、自己評価などに配慮することが必要である。

○学校と学校外の就労支援機関との密接な連携によって間断のない就労支援サービスを行う。

○支援を必要とする若者には個別のサポートがつく体制を整備する。

○支援対象とされ、支援されることで、自らを支援される弱者ととらえ、自信を低下させるという議論もあり、まず、自分で将来を切り開いていくことを支援するセルフヘルプ型のキャリアガイダンスを意図的に拡充する。

○家庭における保護者とかかわり方が子どもの将来やキャリアの根幹にかかわるものであると言える。

○家庭におけるキャリア教育の必要性およびその方法等に関して、幅広く意識啓発・広報宣伝を行う。

学校教育の対象者の中に、最大10%のひきこもり親和群が存在

・平成19年度調査（15～34歳の一般の若者を対象）

4. 8%のひきこもり親和群

・平成21年度調査（通学している生徒や学生を対象）

各校5～10%（平均8.5%）のひきこもり親和群と目される
自我水準は決して病的ではなく、ほぼ健常者に近いことが示されている。疾病や障害に起因するとは言えない者が多数存在している見方が妥当である。

問題状況に直面しない限り次のステップへ

- ・知的な能力や判断力はそれなりに育っており、ある枠組みが定められた環境では、特に問題が露呈することはない。
- ・露呈するのは、自分の力で社会的営みを遂行しなければならないという場面に直面した時
- ・特に問題状況に直面しない限りは学校に通う。偏屈さが受け入れられずに、いじめのような場面に直面し、不登校になる者もいるが、多くはそのまま学校を終えて、次のステップに足を踏み出していくものと思われる。

自立することを嫌がっていない存在

- ・「自立しなければいけない」「でもできない自分が情けない」「失敗が怖い」「自己責任を求められる」「他人の評価・批判を受けたくない」・・・・・・そうした心が常に揺れ動いている。
- ・ひきこもりのタイプ
 - ①他人に自分のことを分かってもらいたいという気持ちが強く働いているケース
 - ②自分が安心できる居場所を確保したいと願っているケース
 - ③時間の制約や枠組みに縛られたくないケース

※人は、人間、空間、時間という、三つの狭間に生を営む存在である。望むらくは、そのいずれもが自分の思うようにコントロールできることであり、その思うようにコントロールする方向が、ゆがんだ状態として出現しているのが「ひきこもり」であると思われる。

今、最も求められていること

- ・人は人によって支えられて生きているという「共助」という感覚をいかにして貯えさせていくか
- ・「自立」＝「自助」ではなく、「自立」＝「共助」＋「自助」であることを、教え育むことを大人たちは真剣に考えるべき時に来ている。

若者に社会不適合をもたらさないために～若者の心情を理解したかかわりについて～